

編 集 後 記

—研究者魂—

3月11日は、妙高の標高720mの所で、卒研学生4人と森林総合研究所のTさんと積雪断面観測を行っていた。曇ったり、雪が降ったりの天候で、帽子をかぶらない学生の頭は雪で白くなっている。降雪よけの大きなビーチパラソルがゆっくり揺れる。みんな一瞬動きを止める。地震だ。けっこう横揺れが続く。遠くだな、でも大きそうだ。と思っているとまもなく携帯電話から、学生が震源は宮城県ですと教えてくれる。夜遅く、長岡に帰って驚いた。連日つづく地震関連のニュースが始まった。

しばらくして、地震の研究をやってこれだけ退職された秋田市のK先生と電話で話すことができた。退職後も駒ヶ岳の火山地震活動に関心をもたれ、あちこち動き回っておられる。「多賀城に平安時代の津波の跡などが観測されている。あの時代は日本列島全体で地震火山活動が活発だった。いろいろ見てみると、最近の日本列島も活動期に入っているかもしれない。ある意味では、それを見る、体験できるチャンスだと思っている。」というようなことを言われた。冷静でたいしたものだなと思った。

阪神淡路大震災の2週間後、地質学者の藤田和夫から梅棹忠夫への電話の話。「家は芦屋にあったが、大阪の断層研究資料センターを主宰して、阪神平野における活断層の活動の危険性から大地震を予言していた。かれは電話口で、いきなり『おれの学説が完全に証明された』』といった。わたしは『家はどうやった?』

と聞くと、『家はつぶれた』という。わたしは、かれのはげしい研究者魂に感動した」(「行為と妄想」梅棹忠夫)を思い出した。

1000年に1度の東北地方太平洋沖地震、それだけでも大震災だが、大津波そして福島原発という経験したことがない災害が続いている現在(2011.3.20)、長岡でもミネラルウォーター、電池、カセットコンロとボンベ、ライト、ラーメンが店から姿を消した。パン、ヨーグルト、納豆も不足気味という。

少し研究者らしく考えるのは、地震で破壊されたあの地域の地震計、験潮儀の再設置が一刻も早くされればと思う。そして福島原発に関連して、速やかな風向風速計など気象測器の再設置と強化そして放射能汚染分布の早期の情報公開を望まないではいられない。地震計、験潮儀、風向風速計などのデータは、現在の状態を記録、そして検証するのに欠かせない基礎解析の基礎データである。誰が言ったのか不案内であるが、「現在を正確に記録するのは、今、生きている人の責務である」。地球温暖化時代に入ったといわれる昨今、雪氷環境の記録も大事になってきた。それぞれの立場で考え、行動することも重要なことに思える。

(佐藤和秀)

※2004年10月23日、新潟県中越地震が起こり、車生活などを体験しました。冊子「新潟県中越地震体験記 長岡高専」があります。ご希望の方は連絡下さい。